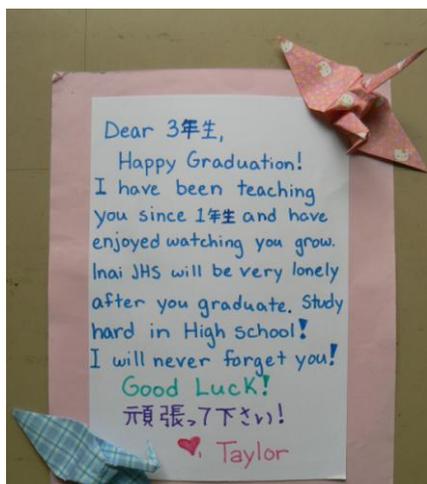


故テラー・アンダーソンさんに捧ぐ

平成 23 年 3 月 11 日、強い揺れの地震から生徒全員が校庭に避難することになった石巻市立万石浦(まごくうら)小学校にて怯える児童をはげまし、無事保護者への引き渡しを終えたテラー・アンダーソンさん(24)は自転車で小学校に程近い万石浦中学校方面へ向かった。最後にテラーさんの姿を見送った先生ははっきり自転車で中学校へ避難するものだった。

しばらくして猛烈な速さで巨大な壁と化した津波が牙をむき沿岸の港、商店、自動車、住宅、畑を次々に襲ってきた。万石浦小学校でも保護者への引き渡しの後、児童が親の運転する自動車に乗って家族もろとも波に流されていった。

テラーさんはその時、平らな市街地を抜けるいつもの道を選んでいて、市内八ヶ所の小中学校を巡回する勤務でペダルをこぐのに慣れた道だった。たちまち海側から道にあふれ出した水はすぐ「黒い波」に変わった。その「黒い波」との格闘をどれだけ試みたであろうか。一生懸命もがいた彼女もついには勝てなかった。二年半以上にわたり目にした石巻の風景がみるみるうちに変わっていく様と、自分の授業で関わった生徒やいつも温かく接してくれた同僚の先生方との思い出を記憶に残しながら、多くの人たちと一緒に、石巻を遠く天空から見下ろす場所に昇っていった。



テラーさんが残したメッセージ
石巻市立稲井中学校提供

テラー・アンダーソンさんは 2008 年に大学を卒業して JET プログラムの ALT として来日し、石巻市内の小中学校に勤務していた。外国語指導助手として英語教育を通して多くの人と交わり、石巻を愛してやまない米国人の一人として、ひときわ人望が厚い存在だった。

石巻市立稲井中学校では翌日の卒業式を前に、彼女が一年生から教えた卒業生に宛てたお手製の折鶴付きメッセージが掲示を待つばかりだった。(左の写真)

稲井中学校に隣接する稲井幼稚園でも彼女は教員や園児と深く触れ合っていた。園児がダッシュで彼女のもとに駆け寄りジャンプすると、彼女はそのままギュッと抱きかかえる。すぐさま園児が彼女の頬にキスをするのが園内の微笑ましい日常風景だった。

ヴァージニア州の両親に津波のニュースは早朝届いた。「日本で大地震発生」、「マグニチュード 9.0」。テラーさんの携帯電話には何度かけても通じなかった。安否確認がとれない 10 日あまりが過ぎていく中、父リロイさんに届いた駐日米国大使館からの知らせは残酷すぎるものであった。三人兄弟の長女で、日本のアニメが好きになり、自ら日本語を学び始め、石巻の子どもたちの英語への好奇心を熱く語ってくれたテラーさん。恋人のジェームスさんも彼女に誘われ太平洋を越えて会いに行ったあの国で、まさか大地震による津波での彼女の訃報を聞かされようとは…。53 歳のリロイさんには耐えがたかった。

3 月 21 日正午過ぎ、ワシントン・ダレス空港発成田行きの全日空 1 便には父リロイさんと恋人のジェームスさんの二人だけが最小限の荷物と一緒に乗り込まれた。

3 月 22 日 14:55、定刻より 30 分ほど早く成田空港第 1 ターミナル南ウィングに到着。ボーディングブリッジを渡ったところで駐日アメリカ大使館員が出迎えた。イミグレーションを過ぎ、ターンテーブルで荷物をカートに乗せ、税関を通り到着ロビーへ。クリアのジャマイカ人と日本人のスタッフが出迎えて挨拶をした。

これからテラーさんの石巻へ。大使館が用意した車で 70 キロ近く離れた羽田空港に移動するとの説明の後、ターミナルを出発した。ガソリン不足のせいであろうか、極端に交通量の落ちた高速道路を通り、海底トンネルを抜け、1 時間ほどで空港到着。航空会社カウンターで搭乗手続きを行い、全員でターミナル三階のレストランでディナーをとった。この時リロイさんは一寸ほっとされたのか初めての笑顔を浮かべられた。搭乗口で二人の大使館員と別れ、これからしばらく付き添いをするという二人のクリアスタッフとの四人で 18:40、山形行日本航空 4559 便に搭乗した。

山形空港から出迎えたワゴンタクシーで仙台のホテルには 21:30 頃着いた。冷たい雨が降っていた。ホテルといっても通常営業は行われていない。仙台市内は電気・水道は復旧したが都市ガスがまだ通じていないためだ。負傷者救護に携わる医師チーム、看護師チーム、災害復興の携わる電力会社やガス会社のチームが相次いで到着し、チェックインのために並んでいた。

「今回は一番お知らせしたくない結果をお伝えすることになり、受け入れた宮城県としても大変残念です。ご滞在中はご希望通りのスケジュールを組ませていただきますのでご遠慮なくおっしゃってください。」出迎えた宮城県経済商工観光部の参事からゆっくりと丁寧な言葉で挨拶された。隣に同席された課長補佐の目も赤く潤んでいた。

翌 23 日朝 8:30、ホテルを出発。東京から到着した四人に、昨日出迎えてくれた課長補佐、それにテラーさんの同僚だった CIR のキャメロン、ALT のキャサリン、ブロックが同じマイクロバスに同乗した。想い出話に花が咲いた。ほんの些細な思い出でも、彼らは車中で披露してくれた。テラーさんは週末の勤務終了後、JR 仙石線に乗り仙台にやってきて、彼らと夕食をよく共にしたらしい。バスが 4 号線から 45 号線に入り、港湾関連の企業の看板が現れたころ、景色が一変した。道路が砂に覆われ始め、両側の駐車場に停まっていたはずの車が一か所に積み上がったり、ひっくり返ったりしている。パチンコ店やファーストフード店の正面玄関のガラスがことごとく割れていた。道端の瓦礫等の障害物も目立ちはじめ、思うように進めない事態となって、バスは多賀城址から利府町方面に進路を変更した。緊急通行車両としてのステッカーが掲示されていたため、三陸自動車道をゆっくりと走行できた。車窓から見えるパトカーには様々な府県名が書かれていた。

石巻港インターチェンジを抜け、一般道へ下りた。水田と思われる広大な土地が水とゴミにさらされていた。道の両側の店では津波の高さを示す泥がついた一定の高さの境界線が鮮やかに残っていた。バスは石巻市内の遺体安置所の一つ、旧青果花き地方卸売市場に到着した。二年前までは市場だった場所だそうだが、上屋の建物は被害もなく、急遽身元確認のため安置所として使われていた。車内でしばらく待機した後、配布されたマスクを着用し慌ただしく人が動くテントの方へ向かうよう案内された。

テントの前を通ると写真が張り出されている掲示板を多くの人が食い入るように見ている。身元確認のとれない数十枚の遺体の写真だった。一枚も見落とさないように凝視する多くの人からは尋常ではない空気がテント内に漂っていた。そのうちテントから出てきた一人の男性とすれ違った。携帯電話をかけて話すのが聞こえた。「やっと見つかったよお。よかったあ！」言い終わらないうちに男性は嗚咽していた。

担当の警察官が台帳で番号を確認し、これから旧市場内の一番奥の建物に案内をすることになった。人影がなくなった一番奥の建物に着いた。「あ、この右の一番手前の棺ですね。」警察官より入口から見える床に安置された棺が案内された。入口のすぐ手前で父リロイさんは CIR のキャメロンに「テラーの顔を知っている友人から先に入って、棺の人物がテラーかどうかをもう一度確認してほしい。」と絞るような声で話された。課長補佐、同僚のキャサリン、ブロック、キャメロンが順に棺を覗いて出てきた。全員無言のまま頷いた。それでもリロイさんはまだ足を前に動かされなかった。

「顔だけの確認でも結構ですので…」同行してきた者にとってもナイフのような言葉だった。やっと父、そして恋人の順で中に入られた。白木の棺のシルバーのシートの中から顔だけがのぞいていた。安らかに眠るテラーさん本人に間違いなかった。アメリカを発つときからこの瞬間を予想はされていたはずだが、現実は一。棺が並ぶ旧卸売市場の建物の中で二人の号泣だけがこだました。同行したクリア日本人スタッフと課長補佐が「10 時 26 分ですね。」と腕時計を見て確認しあった。そのあと、誰も話せなくなった。

3月24日11:00、雲ひとつない晴天の下、石巻市日和山公園に遺族、同僚、知人など関係者11名が集った。彼女のアパートの背後に位置するこの日和山は標高56m余りの小山で、鹿島御児神社が鎮座する市内を一望できる場所である。被災状況を高いところより確認するために訪れていた人の流れから数メートル低い見晴らし台のベンチに、父親、恋人が持参した遺影を海に向けて追悼セレモニーが開催された。昨日の身元確認後改めて訪問した彼女のアパート、稲井中学校、稲井幼稚園、万石浦小学校、そして遺体発見現場である黄金浜。すべて彼女の崇高な思いが溢れている場所だった。恋人のジェームスさんは中央の遺影の横に昨年夏に宮城を訪れた際、松島をバックに右手を大きく伸ばして彼女とおさめたツーショット写真を飾った。「ちょうどその時もこのカメラで撮ったんだよ。」懐かしむように自分のカメラを見せてくれた。

遺影を前に言葉を詰まらせながら彼女への感謝と別れの言葉を話される父、リロイさん。すすり泣きの声を懸命に抑えつつ一言一言噛みしめて語られた。

セレモニーの後、発見された黄金浜方面を望む高台へ父親と恋人が並んで立った。リロイさんは優しく彼の肩に手をかけ、二人きりで遠くを眺めながらしばらくの間静かに語り合っていた。瓦礫しか見えない石巻の街が眼下に広がっていたが、それを包み込むテラーさんの微笑みがお二人にはきっと見えていたことだろう。



テラーさんの遺体は火葬が周辺施設で直ぐできないことから、3月23日夕方に埼玉県川口市で「湯灌(ゆかん)」されるため父と恋人より一足先に石巻を離れた。そして3日後二人は普段着のまま東京板橋区の葬祭場で火葬に立ち会われた。

帰国後、真っ先にヴァージニアの彼女の母校、セント・キャサリンス・スクール内に「テラー・アンダーソンメモリアル基金」(Memorial fund in honor of Taylor Anderson)を立ち上げ、彼女の遺志を継ぎ、石巻市の学校のために彼女が愛した生徒達へ向けて活動されているリロイさんにご家族に対しては敬服の念しかない。(基金の詳細はこちらへ <http://www.st.catherines.org/tayloranderson?rc=0>)

石巻市内で訪問した彼女の勤務先では、リロイさんは熱心に同僚の先生方からテラーさんの最近までの活躍ぶりや懐かしい思い出話、そしてあの日別れた時の様子などを詳細に聞いていらっしやう。すべて「OK。」と返事し、誰にも責めの言葉や、後悔の言葉を一言も漏らされなかった。テラーさんの遺志を理解する父親として、気丈に接している姿が横で見ていると堪らなかった。素晴らしい父と娘の在り方だと今なお尊敬する限りである。

今回父親のリロイさん、恋人のジェームスさんと悲しくてつらい旅を共有できたお陰で東京の一友人になることができたことと自負している。彼女の崇高な思いを振り返りつつ、石巻市、宮城県、そして被災地のいち早い復興を心から願いたい。そのために微力ながら現地に向けて自分にできることを継続していく所存である。改めてこの度の訪問に際し、献身的なご協力とご配慮をいただいた宮城県、石巻市、関係各位に心から感謝申し上げたい。